

「愛がなければ」

2023年2月5日

コリントの信徒への手紙一 13：1～13

佐々木 佐余子

この13章は読む人に深い感銘を与えます。パウロ書簡の最高峰です。けれど、コリントの信徒たちは一体、どのような状況に立たされていたのでしょうか。そのようなことをあらかじめ知ったうえで読むと愛の賛歌が響きます。当時は迫害がありました。信徒たちは危機感を覚えていました。また、教会内部にも様々な問題をかかえていました。このような中でパウロは愛の手紙を送ったのです。というよりか、そのような状況だったからこそ愛の手紙を送ったのではないのでしょうか。パウロは多くの人々から愛され、使徒として働いていましたが、なれど、パウロに反目しパウロの使徒職をも疑いの眼で見ている者もいたのです。そして、ユダヤ教の人たちから裏切り者として映ったでしょう。そのようなことを承知で愛の賛歌を送ったのです。だからこそ愛の必要性を説いたのです。

しかし、どうしてこのような愛の言葉を発せられるのか。思うに、一つは主イエス・キリストに倣っている。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」というみ言葉に従っているから。「敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」という信仰を受け継ぎ大事にしているからではないのでしょうか。パウロは言います。「そこで、わたしはあなた方に最高の道を教えます。」と。この世で最高の道、それは人を愛することなのです。愛するとは勿論男女間の恋愛ではありません。1節を読むと、「たとえば、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、私は騒がしいドラ、やかましいシンバル」と言っています。ここはよくわかります。本当にその通りです。ここでは、人々の異言と言っていますが、口語訳の訳だと「たといわたしが、人々の言葉や御使いたちの言葉を語っても」と訳されています。異言というのは、天使の言葉であり、信仰深い人だけに与えられたり、理解出来たりするものと考えられていました。そのような異言を語っても愛がなければ虚しく響きます。パウロは、「たとえば、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえば、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ無に等しい」と言います。ここにパウロの人間性を見ます。どんな頭脳明晰な学者であっても、そこに暖かい血が流れていなければ無に等しい、と言います。ある冷たい人の話をします。昔、アメリカ大陸が発見され、後にイギリスから開拓民が入植してきました。プリマス植民地の人々です。メイフラワー号に乗って100人ほどの貧しい人々、キリスト教徒が2月の厳寒の中、海を渡ってセーラムという港に到着し植民地を造るのです。それは1620年の頃でした。彼らは自分たちの宗教的信条を持っていて自分たちの礼拝をしたいためにイギリスから渡って来たのです。しばらくして生活も落ち着き会堂も出来て、主日礼拝をするようになりました。礼拝をするには牧師を招かなければなりません。そこである高名な非常に学識に優れた牧師チョンシー先生を招きました。この先生はギリシャ語とヘブル語に精通しており、かつ信仰の篤い人でした。ところが愛のない人だったの

です。開拓民は皆子供に幼児洗礼を授けてもらいたいと願っていました。ところがチョンシー先生は12月の寒い中、海に全身を漬ける浸礼で授けたいと言い張りました。彼は非常に激しい性格の人であり頑固だったのです。プリマスは北海道の最北端より北に位置するのです。そのようなところでバプテスマを行ったら、ヨルダン川ではあるまいし、抵抗力のない幼児はどうなるのか。勿論親は反対したのですが、牧師は意見を変えることはなかったといえます。幼児はどうなったのか、日記には書かれていないのでわかりません。幼児は命がけで受けたかもしれないけれど、血も涙もない牧師でしょう。このような牧師はいくら信仰篤くても愛がないので無に等しいのです。また、キリスト教史2000年の歴史で山を動かした人はいます。宗教改革のルターやカルバンはあのカトリックという山を動かしました。彼らは愛があるからこそ、それに続く人が出たのです。

パウロは人間の営みは愛が基礎になっている、と言います。ここに世俗との対比が明らかにされます。この世は、私が言うまでもありませんが、お金で回っているのです。お金が王様の顔をして君臨しているのです。皆がお金に仕えているのです。しかし、パウロの目はお金で買えないものをはっきり見ている。「たとえ、全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、愛がなければ私に何の益もない」と言っていますが、それは偽善になるからです。主イエスは偽善を非常に嫌っていました。「はっか、いのんど、ういきょう等の高価な香辛料の十分の一は献げるが、律法の中でもっとも重要な正義、慈悲、誠実はないがしろにしている」と律法学者やファリサイ派の人々を非難されました。「誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、私に何の益もない」とパウロは語ります。わが身を死に渡そうとも、というのは殉教してもということです。そのような誇るに値する尊い行為も、ただ称賛を浴びたいから殉教するのであれば、何の益があるのか、ということです。

このようにパウロは人間の言動に少しの不純もゆるさないので。ここにパウロの純粋な信仰が現れます。パウロは豊かな霊性を与えられています。4節からの段落は愛の性質を語ります。昔、このような説教を聞いたことがあります。この愛のところに自分の名前を入れて読むと恥ずかしくなる、とある先生は言われていました。「佐々木は忍耐強い、佐々木は情け深い、妬まない、自分の利益を望まず……」恥ずかしいです。でもここに、イエスさまの名を入れるとすっと通ります。「イエスさまは忍耐強い、イエスさまは情け深い、妬まない……」と。愛なる人はイエスさまの人格そのものではないでしょうか。従って、愛は決して滅びないのです。預言はすたれ異言は止み知識はすたれても、愛は滅びることはないのです。

今から大分前の事件、2010年に南米チリで落盤事故がありました。落盤によって33人の工夫が深い穴に閉じ込められたのです。世界中の人々が釘付けになっていつ救助されるか固唾を飲んで見守りました。一人一人引きあげられ、最後の工夫が終わった時、歓声が沸き上がりました。33人の人たちは信仰と希望は失わなかった、と言います。それは地下に別の縦穴が掘られ食料品やその他必要な物と聖書が届けられていたそうです。33人の人たちは聖書を読んで希望を持ち耐えたのです。そして、そこにもう一人のお方がおられま

した。主イエス・キリストです。主イエスが共におられ励まされたのです。信仰は苦難の時こそ強くなります。平凡な日常の時は信仰のゴムは緩んでも、緊急の時は御身を現します。底から一人ずつ引き上げられた時、ある人が被っていたヘルメットに聖書のみ言葉が書かれておりました。それを見て感動しました。チリはスペインから独立した国なので多くはカトリック教徒であり15%はプロテスタントであると言われます。17日間も地下に閉じ込められていて救出された時、ミサを捧げていました。神さまの愛を感じたでしょう。

私は前、ヘンリー・ドラモンドという人の執筆した『愛の考想』という本を読みました。その本によると、愛を行うには練習が大事なんだそうです。美術館に行くとき人を感動させる絵が展示されています。画家はすぐそのような傑作を生みだせるわけではなく、何回も練習して描き上げるのです。よく油絵を見ると、削ったり盛ったりしてある跡があります。音楽家もすぐ人前で歌えるわけではなく、発声練習したり語学の勉強をしたりして歌いこみます。余談になりますが、私の妹は子どもの頃から低音でガラガラ声でした。ある日、二階からソプラノの歌が聞こえてきました。素敵な声で誰かが来ているのかしら、と思ったのです。しばらくして降りてきた人は妹でした。妹はピアノ専攻でしたが、声楽も勉強していたようです。余りの変わりように驚きました。そのように愛も練習が必要なんだそうです。人が魂を働かせないなら、魂の筋肉や人格の強さは、精神的な成長は得られない、と言います。魂の練習をすることによって、人は忍耐できるようになり謙遜になり寛容になり無私になり親切になり礼儀正しくなれると言います。パウロも愛の境地になり到達するまで、様々な修羅場をかいくぐって来たと思われまふ。決して、一朝一夕に愛の賛歌にたどり着いたのではなかった、と思います。迫害されては忍耐を学び、人を愛することを学びつつ学んでいったのではないのでしょうか。8節からは段落が変わり、パウロの終末信仰が見られます。12節「わたしたちは、今は、鏡におぼろげに映ったものを見ている。だがその時には、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる」と言います。今の現状では神の国はおぼろげに見ている。教会は神の国の写しだから、はっきりとは見えていない。けれど終末時には物事ははっきりと見えるようになるのだと語っているのです。この言葉は異端の偽教師を遠回しに頭において牽制(けんせい・相手の注意を自分の望む方に引き付けることによって、自由に行動できないようにすること)しているのです。パウロならず他の使徒たちも皆、この世の終わり、終末が来ると信じていました。あのひどい迫害が行われていたのですから当然です。今も、終末時計は秒読みだと思ふ人もいるそうです。ウクライナとロシアの戦いはいつ果てることなく核によって終わるのでしょうか。皆危機感を持っているのです。初代教会の時代、危機感を持っていたからこそ、使徒たちは早く世界中に福音を伝えなければと伝道しました。また、ぬるま湯につかった信仰ではなく熱い信仰を持ちなさいと教えました。罪に覚醒しはっきり目覚めて歩みなさいと教えました。終末は人の死も意味します。人にとって死ぬことは終末なのです。今度、19日に教会全体研修会があり、凱旋の備え(終活)についての学びがあります。前から聞きたいと思っていたのでうれしい企画です。専門の司

法書士さんや葬儀社の方のお話を伺って今から備えたいと思います。

コリントに戻りますと、今は何も知らないでコリントの人たちを惑わせているけれども、終末が来て、本当の神の国が来たときは、彼らは神から罰せられ滅びるのだと言っているような感じがします。何しろ彼らは愛がないから、自分が崇められたいために皆を扇動しているからだと言っているのです。13節「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」と語ります。私たちも愛の共同体にならせていただいて歩ませていただきたいと思います。

それから3日金曜日に開かれた関東教区教会婦人会連合主催の研修会の報告をさせていただきます。礼拝の部の説教は初雁教会の町田さとみ先生でした。説教題は「油を備えて待つ」でマタイによる福音書25章1～13節からでした。その後講演がありました。講師は大坪園子先生で熊谷教会の副牧師です。初めに福音唱歌を数曲歌ってくださり、その後説教があり、ご自分の2人の子供さんにどのように信仰の養育をしているかを絵本を使いながらお話してくださいました。上の子供さんは9歳、下の子供さんは2歳ということです。多忙な時間を割いて準備してくださり大変だったと思います。女性牧師は何役もこなさないとならないのですが、それだけ恵みも大きいのだと思います。